
青猫カルテット！

明夢 優深

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青猫カルテット！

【Zマーク】

Z5366U

【作者名】

明夢 優深

【あらすじ】

え、この美青年誰ですか！？困惑ぎみの香澄に突きつけられた真実は、「うん、アオトは俺だよ」マジですか。好意たっぷりの飼い猫、アオトに香澄は！？

「・・・なに、これ

といふか、何、この状況！？

「・・・あの、え、何、これ」

何で、ネコミミ生えた男の人が、私の上で膝枕されてんのーー!?
・・・うん、落ち着け。この状況になつたのは、少し前の事だ。整理をしよう。

「ただいまー」

ガチャリ、と仕事から帰つてきて、するとアオトが私を迎えて入れてくれたんだ。

「ニヤーー」

「あ、アオト。ただいま」

「ナーツ」

嬉しそうに鈴をチリンチリンと鳴らしながら、私の周りをトテトテと歩くアオト。

青色の毛で、赤い瞳を携えた、とても綺麗なオス猫。それがアオトだった。

捨てられていたところを偶然見つけて、拾つたのが始まり。
そもそも一人暮らしだつたし、猫も好きだったので拾うのに躊躇はしなかつた。

「ほら、いい子で留守番してた?」

「ナーー」

抱き上げると、鼻先の辺りをペロペロと撫でてくれるのがくすぐったいけど可愛らしくて好きだ。

ソファに座ると、必ず私の上に乗つて、気持ち良さそうに欠伸をする。

今日もそうだった。それで、私も気持ちよさそうとじつと少し寝

てしまつて……。

それで、現在に至るわけだが。

まさかこの青髪ネ「//」美青年がアオトだなんて私の頭は理解しないわけで。

「あ、あの……」

だから、おずおずと、しづしづと、こわいわと、聞いてみる。

「うう……ん」

・・・起きない・・・だと・・・!?

起こううと躍起になつて肩を揺さぶつていたら、ある事に気が付いた。顔しか見ていないからわからなかつたけど、

「・・・・・!?!?

ふ、服着てない!?!?!

驚いて騒ぎたい気分だつたけど、残念ながら身動きがとれないで口を塞いでもぞもぞするしか手立ては無かつた。

・・・と言つたが、一度裸だとわかつたら、もう意識せずにはいられない!?

「お、起きて」

それでもなんとか顔だけ見よつとして、声をかけた。

「・・・ん、香澄・・・」

彼の言葉に驚いたのは、私の名前を知つていたから。目を開いた。綺麗な赤色の瞳だつた。

「ア、アオト・・・?」

「うん、アオトは俺だよ」

彼は自分があの猫のアオトだと言つと、私のお腹に頬を摺り寄せてきた。

「！」

「香澄・・・好き」

驚いて声も出ない、とはこの事だらう。

アオトは起き上がると、私と向かい合つように隣に座った。

「あ、俺……何も着てない」

自分の格好に気付いたアオトは、徐に私に身体を摺り寄せてきた。

「・・・！？」

非常に言いづらいし、言いたくは無いんだけど……。

「ア、アオト」

「何？」

「当たつてる……」

「当てる」

「はい！？」

驚いて何も言えない。

「香澄、好き。だから俺、人間になつてみた」

「は？」

目の前にいる綺麗な少年は、目を細めて、

「俺、人間になれるんだ。まあ、耳とか、尻尾とかは消せないんだけど……」

衝撃の一言を放つた。

「いつから……？」

「結構前から。でも、夕方から朝方にかけてで、しかも俺の意思では変えられないから、今まで香澄の前にこの姿では出でこれなかつた」

「・・・でも、今は」

「調節出来るようになった。だから、これからはいつでもこの姿でいれる」

我が家ペットの大変重要なお話を聞いて、動搖を隠せなかつた。

「だから、いつでも交尾が出来る」

「はい！？」

またまた衝撃の一言が出てきた。

「人間は、好きな人が出来ると交尾をするんだろう？猫と一緒にだ」

それは、アレですか。ようするにセツ……

うん。やめよう、」この場で私も言えれば收拾がつかなくなる。

「えっと、アオト？嬉しいんだけどね、私・・・」

「香澄、今彼氏いないだろ？なら、俺にしき」

「・・・」

バレてた。いや、男の人を家に連れて来た事ないし、それはアオトにバレバレだつたんだろう。

どうせ女子会が生甲斐の寂しい女ですよッ！――

「でもね、アオト。私はアオトが好きだけど、そう言つ意味の好きじゃないの」

「好きにも種類があるのか？」

首を傾けて訊いてくるアオト。それはまるで猫みたいで・・・って、猫なんだけど。

「うん。私の好きと、アオトの好きは違うの。私は、アオトを家族の意味で好きなの」

そつ言つと、アオトは私の首に腕を絡ませて、身体をグッと近づけてきた。

「わっ」

「・・・じゃあ、無理にでも好きさせや」

「アオトッ！」

思わず大声で呼ぶと、アオトがビクリと肩を震わした。

「・・・あ」

そつか。いつも悪戯をするといついつ風に怒つてるから、反応しちゃつたのか。

「香澄、俺、悪い事した？」

「ううん。でもね、ビックリしたの。アオトが行き成りこいついう事をするから」

尻尾をゆらゆら揺りすアオト。安心したみたいだった。

「アオト」

頭を撫ると嬉しそうに喉を鳴らした。やっぱり猫なんだなあ。

「アオトは、他のメス猫を見たことがある？」

「ある。でも、香澄の方が好きだ」

「そうじゃなくて」

遠まわしに断られると思ったのか、断言するアオトに苦笑すると、「猫と人間は、種類が違うでしょ？だからね、恋人にはなれないの」

「……じゃ、愛人は？」

何て言葉を知ってるんだこの猫は！？こんな不純に育てた覚えは無いぞ！！

「恋人とか、愛人とか、そういうレベルじゃないの、そもそも恋愛ができないの！」

少し強く言えば、ゆらぐ赤の瞳が、私の心を締め付けた。

「……でも。俺は、香澄が好きだ。叶わなくても、いい」

でも、強く決意する瞳に、何故だかホッとする私がいた。

「アオト」

「だから、香澄。この位は、許して」

え？と言いかけた唇を、軽く塞がれた。

少し侵入された舌は、すこしづらついていた。

(後書き)

短編第三弾ー色々ハチャメチャになってしまった・・・。
一度で良いのでこんな感じのを書いてみたかったので、満足!
アオトみたいなペットが欲しい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5366u/>

青猫カルテット！

2011年7月9日14時36分発行